

第一卷)

辻村 太郎 地形學

北田 宏藏 大陸漂移說解義

大橋 良一 伊豆大島の地形が東西に於て異なる理由(地質學雜誌)

中村新太郎 丹後峯山地震に顯れたる起震源と地弱線(地球第七卷)

同 根尾斷層に就て(地球第八卷)

大村 一藏 石油地質學(地球)

外山 四郎 東北裏日本海岸地方の所謂海蝕臺地に就いて(地學雜誌昭和貳年)

福地 信世 豆南諸島と富士火山帶 地學雜誌(明三六年)

大森 房吉 日本地震分布(地理と地震との關係)(地學雜誌明三八年)

中村左右衛門太郎 地震

此他間接にも種々多くの啓示を受けた文獻もある。そして此等多くの諸先生の御教示によつて成つた事を深く感謝する。

矢作川沖積地の地名起原

野 口 喜 一

○位置 三河の大河矢作川の沖積地に於ける農村、特に愛知縣碧海郡六ツ美村の地名起原を茲に記述して見る。前記六ツ美村は先帝即位の大禮に當り、大嘗會悠紀齋田點定の恩命に浴した所で、北は僅に岡崎市に接する面積二方里餘の農村である。

附近は概ね沖積層の平地で、西は矢作川の清

流に洗はれ、白帆時に風を染んで上下す。東方より南方に亘つて、削剝を受けた花崗岩、片麻狀花崗岩より成る木曾山脈の餘派が起伏してゐる。

太古此の地は現在の如き平地ではなく、桑田變じて海となるの反對で、蒼海變じて桑田となつたもので、碧海郡上郷村大字渡刈に潮先神社

の名があるのは、此の邊迄海水の満ちてゐたものであらう。北方諸山の地より雨水は亂流して汎濫し、山間の土砂が流出して一面の砂原となり蘆原となり、後に肥沃の地を選んで人民が來住し、村落となつたのであらうと思はれる。爾來自然と流域は定つて、一大河川となつた。亂流砂原に高き邱の突出した所を岡崎と呼ぶ様になり、又矢作の名は日本武尊の御東征の時、此處にて矢を矧ぎ給ひしに依つて起つた名である。爾來河川の流域は定まり築堤せられて後地名に従つて其の名も生じた様である。矢作川河道の最近の變遷に就て嘗て故吉田東伍博士も説かれた(日本歴史地理之研究三五三頁)

○地名起原 現今の六ツ美村は明治の初年に二十九の小村が分立してゐたのであるが、其の後幾多の變遷を重ね明治二十九年には青野村、合歡木村、占部村、中島村、糟海村の六ヶ村となつた。それが更に明治三十九年に至り、前記六ヶ村は合一して一團となり、和衷協同、互に揖睦して此の併合を紀念し、且有終の美をなさん

として村名を六ツ美(陸の意)と號し今日に及んだ。次に各聚落名起源の概要を記す。

青野 は所謂蘆島五郷の一つで舊記によれば古昔本村の四隣は悉く海灣であつたが、星霜の久しき漸く桑滄の變をなして遂に原野となる。初め此の青野に廬を結びたるもの僅かに四五戸、漸く開墾して村落をなせりといふ。青野の名稱はもと原野に綠草の繁茂せしより名づくといつて居る何時の頃よりか上青野、下青野の二に分れた。上青野村の一記に合歡木村、在家村、高落村(現今幡豆郡に屬す)等は皆青野の支村であつた。

青野の村名に關してなほ一説がある。即ち青野は青海の轉訛であつて、碧海は即ち青海の青を碧に改めたものである。新撰姓氏錄右京皇別上に『御立史。持統天皇御代依居三河國青海郡御立地賜御立史姓』云々とあるのを見れば、持統天皇の御代既に青海郡の稱があつた事を知る事が出来る。又續日本紀に『稱徳天皇元年神護元年四月丁亥三河國碧海郡人從八位上石村主

云々」とある。これが歴史上に碧海郡といふ郡名を見るの初めである。なほ碧海の名稱に關しては一般の説として此の地は、往昔海水が深く灣入して、蒼海をなしてゐたから碧海即ち阿乎美(碧海)と稱したといふ。

在家。は佛教語で火宅僧(妻帯の僧)即ち在家僧の謂である。三河二葉松碧海社領の分の中に、下青野村椿大明神並に天神同所薬師領一石五斗在家地藏領二石とある。在家の地名は或は此の地藏堂の堂守等に縁故ある名稱であつたであらう。在家はもと下青野の支村であつたとは前記の如くで、此の地藏堂は恵心僧都の御作でもと下青野より分身されたものであるといふ。

合歡木。合歡の大樹があつたに因つての名であるといふ。諸書に械木村とある。太田爲三郎氏地名辭書には『合歡木。古は械木に作り、郷名なり。天文年中松平藏人信孝此に居り、徳川廣忠の命を用ゐずして横暴なりしが、遂に放逐せらるゝとある。

高橋。は正保年間の肇創に係る。里人の傳に

よれば隣村の田畑其の境界出入が甚だしく、時に或は星散して耕耘の便を得ざりしが、衆議の結果各村の境界に於て一地域を劃し額端村と名づく。蓋し額端とは村々の地額の端を集めたるの意に出づ。後世高橋と書くを通常とす。初めは高橋新田と稱したが後改めて高橋村といつた。

三ツ木。古三ツ木五箇村の目があつた。上三ツ木、下三ツ木、上福桶、下福桶、安藤の五村がこれで、何れも三ツ木の分村である。三ツ木は貢の意で、諸貢物を此處に集收して發送した即ち貢村の意である。大字定國山本茂七郎氏藏の古文書には、年貢取立役貢伴左衛門の住地にて寶弘二年村高四百十三石定賜とある。慶安四年三ツ木を分つて上三ツ木、下三ツ木の二村となした。

福桶。は起挿の時に當つて、地中より桶を堀出したので吉兆となし、桶に福を冠して村名になしたといふ。又往昔貢をはかる所の役人斗樹太兵衛の住地であつて福桶の名は之れに基くともいふ。承應年中に上福桶、下福桶の二村とな

る。今は一大字である。

安藤 は村名の起原が明かでない。一説には安藤太郎長基の後裔三河國住人太郎左衛門尉家重岡崎公廣忠に仕ふ。帶刀直次は家重の孫である。家重の遠祖が本村に住み、帶刀直次は後天下に名をなすに至つたので、遂に安藤を以て村名となしたといふ。

中島 碧海郡誌によれば『中島、高畑の地は古の蘆島五郷の一なる河邊の地で、醍醐天皇延喜の、御代四條方盛三河守として此地に住してゐた時中島郷と改む』とある。

正名、定國、國正、中村 の地は舊占部郷の地である。清和天皇の貞觀八年卜部日良麿三河權守に任せられ此の蘆島の地に來て當地の開墾に従事した。占部郷の名はこの卜部日良麿の名に基く。なほ他の舊記によると孝謙天皇の天平勝寶年中卜部氏の管下十三ヶ村となる云々とある。

定國の地は往古定郷と稱した。即ち郡造の祖白田彦連此の地に於て諸々の郷名を定む。是れ

定郷の名ある所以だといふ。日良麿は現今定國鎮座の村社素盞雄神社に配祀せらる。正名の間に四目邸と稱する舊趾がある。卜部氏居住の第趾なりといふ。一老に聞くに正名を正内と書きたるものありと。即ち正名は莊内の意で正内正名等と書き改め遂に現今の如くなつたといふ。占部はもと卜部より出で浦部とも書いた。又國正は國政で往昔國郡の政を行ひし地であつた故にかく名づくと稱す。

上和田、下和田 和田の地は所謂古の蘆島五郷の一たる和田郷の地である。三河二葉松に下和田村上和田村七村の名がある。後世に至り和田郷十二村と稱す。上和田、宮地、井内、野畑下和田、坂左右、法性寺、牧御堂、上土井、下土井、赤澁、福島新田が之である。青野村の一記に中之郷を和田郷の一村と記してゐる。福島新田は舊和田の地たりし所で、今は岡崎市に屬す。日本外史には此の地を輪田と記して居る。村名に就て一説がある。邦語に海を『ワダ』といふ。此の地もと海灣なりしを以て『ワダ』の郷と

稱せしを後世に至り和田の文字を充用せしものであると。

又舊記には往々和田郷附近を久良里と書せしものを散見する。蓋し『日暮里』の謂にあらざるか。仁賢天皇の御守猿田彦御稜の海御調査につき物部與等、大中臣日藤麿碧海の地方を巡視の時、三度夕日となりしにより、此の里を日久良志と稱する由舊記に見ゆ。當時日久良志五箇の郷とは和田郷、蘆島郷、青野郷、江原郷の事にして藤原匡房鎌足の命により當地に來り、芦島大神(大字中島鎮座村社日永神社)に碧海開發を祈る。此の時匡房詠歌あり。

日久良志能里照明爾佐夜婦計弓朝氣和須幾奴
日長支能美彌

上和田、下和田の稱を區別したのは何時の頃か明かでない。

宮地 の名は既に天正十七年の簿書にある。一書に宮路村と書く。宮地、宮路何れも神祠に因るの名で神祠に至る道路の義であらう。又宮地は犛路にして天子行幸の地なりと。諸記にこ

の地の神祠糟目神社を和田郷の祠なりとあるを見る。

法性寺 にはもと天臺宗の一寺があり、和田山法性寺と號した。里人の傳に村名はこの寺號に出でしものなりと。岡崎公廣忠の時寺域に支院六坊あり。六坊の一を定光坊と號し、その住僧某學博く徳高きを以て廣忠公大いにこれに歸依す。遂に天文年中法性寺及六坊併せて岡崎に移る。現今法性寺に残存せるは只當時の寺域中の大日堂一字のみ。同時に什寶として和田山法性寺と記せる古い鬼瓦がある。蓋し當時の遺物であらう。

牧御堂 里人の傳によれば往時矢作川洪水の時堤防決壊して河水が此の地に氾濫した。其の際藥師の銅像、菰に纏はりて流れ來り此處に止る。以て有縁の地であるとし、一祠を建て其の像を安置し菰御堂と稱す。歷年の久しき轉訛して『マキ御堂』と呼び、萬喜御堂の文字を充用せしが、後世牧御堂の文字を用ふ。村名これに起因すといふ。

井内。は和田の新郷であるといふ。されどその起餠は既に久しく天正年中の記に井内の文字がある。村名の原義は詳かでない。地名に龜井樓井等と稱する所がある。井内の村名或は此の井に縁因があるべきか。一説に井は堰にして堰の内外を區別しその堰の内域にあつたから名づくといふ。

野畑。は字の如く原野を開いたものである。里人の傳に起餠七戸に創まり和田の支村である。

坂左右。も和田の支村で、坂左右とは鷺草の轉にあらざるやといふ。鷺草は水邊に生ず。又一説に坂左右は櫻草多く生ずる地で、佐加草村と稱した。佐加草は佐久羅草の約かど。

土井。の名は大三河志には土居とある。本村には古昔城堡があり、土垣があつて、土井は即ち土堰で村名はこれに起因すといふ。後光明天皇の慶安二年に上土井、下土井の二村に分れ、

明治に至り再び合す。村の東南丸山は古昔市街地であつたといふ。又攻戰の地で往々土中より土製の彈丸を掘出す事がある。

中之郷。は大三河志に中野郷に作る。其他の諸記にも中野郷と書いてあるものが多い。後世迄村といはずして單に中野郷と稱した。

末尾に前記の中島に就て一言する。此の中島は街村型の聚落を形成し、其の一部は往古より商家が百有餘あつて、明治の初年迄は毎月一六の日に市場が立つた。然して魚類、雜貨、野菜等の賣買が行はれて遠近の商人が集り來つて賑つた。後明治二十二年東海道線の開通があつてこゝに商工業の趨向に一變を來し、市場は自然滅に歸した。明治四十二年西尾機關鐵道の敷設があつて、村落の南部を走り岡崎驛に至り東海道本線に連絡して、以來商工業の面目を稍々一洗するに至つた。